斑鳩大塚古墳の発掘調査

豊　島　直　博*

Excavation Report of the Ikaruga Otuka Tumulus

Naohiro TOYOSHIMA

要　　旨

斑鳩大塚古墳は奈良県生駒郡斑鳩町に所在する直径35mの円墳である。1954年に最初の発掘調査が行われたが、正確な墳丘の規模や形は明らかにされなかった。奈良大学文学部文化財学科は斑鳩町教育委員会と共同で、2013年から斑鳩大塚古墳の調査を開始した。測量調査、地中レーダー探査、２度の発掘調査によって、①古墳は幅約８m、深さ約80cmの周濠をもつこと、②円墳ではなく、前方部をもつこと、③円筒埴輪、形象埴輪が樹立されていたこと、④古墳時代中期前半（５世紀前半）に築造されたことなどが明らかになった。

今後は前方部の規模を確定すること、段築成や葺石、埴輪の残存状況など、墳丘本体に関する情報を得ることが課題であり、発掘調査を継続する予定である。

【キーワード】 斑鳩大塚古墳、前方後円墳、埴輪、地中レーダー探査

Ⅰ　調査の経緯と経過

斑鳩大塚古墳は奈良県生駒郡斑鳩町法隆寺南１丁目24番地に所在する。1954年、墳頂部に戦没者忠霊塔を建設する際、銅鏡、石釧、筒形銅器、鉄製武器・武具片など多くの遺物が発見された。ただちに奈良県教育委員会による発掘調査が実施され、埋葬施設は割竹形木棺を用いた粘土槨であることが判明した。また、同時に墳丘の測量調査も行われ、直径35mを測る円墳と報告された（北野1958）。

現在、斑鳩町では宅地開発が進み、古墳の周辺にも新興住宅地が形成されつつある。古墳の周囲は依然として田畑であるが、古墳の適切な保存と活用を図るためには、詳細な情報の把握が不可欠である。奈良大学は斑鳩町と学術連携協定を結んでおり、斑鳩町教育委員会と共同で斑鳩大塚古墳の範囲確認調査を実施することとなった。

まず、2013年８月に墳丘と周辺地形の測量調査を実施した。その結果、現存する墳丘は水田耕作による削平を受けており、本来の古墳はもう一回り大きいこと、古墳東側の畑が前方後円墳の前方部の形状を呈することが判明した。さらに、2013年11月に奈良文化財研究所の協力を得て、古墳周辺の地中レーダー探査を行った。その結果、古墳の周囲に周濠が巡る可能性が高まった。遺跡の範囲を確定するためには発掘調査が必要であり、2014年３月に最初の調査を実施した。

平成27年９月30日受理　*文学部文化財学科　准教授

この発掘調査によって、古墳の北側で周濠を確認した。しかし、前方部の周濠の想定部分はすでに削平されており、前方後円墳か否かを確定することはできなかった。そこで、2015年３月に再び別の位置で発掘調査を行った。この調査では前方部の周濠と墳丘の一部を検出し、斑鳩大塚古墳が前方部をもつことが判明した。ただし、前方部の幅は当初の想定よりも狭く、前方後円墳か、帆立貝式古墳なのかは確定できなかった。今後、前方部の規模や墳丘の構造を解明するための調査が必要である。以下、それぞれの調査の内容をさらに詳しく述べたい。

Ⅱ　測量調査と地中レーダー探査

測量調査は2013年８月に実施した。1954年に作成された墳丘測量図は等高線の間隔が１ｍであったため、段築成の有無など墳丘の細部が判別できなかった。今回は等高線の間隔を20㎝に設定した。まず、現存する墳丘の周囲に木杭を打ち、古墳南側と西側に位置する国土座標基準点からトラバース測量を行い、基準となる杭の座標を求めた。さらに、古墳を取り囲む杭の座標を閉合トラバースによって算出した。平面図の作成には、近年ではトータルステーションを用いる場合が多いが、今回は参加人数が多く、初歩的な教育的効果を重視ししたため、レベルと平板によって行った。

測量の結果、①墳丘北側の斜面は築造当初の形状を反映する可能性が高いこと、②東側の畑の輪郭が前方部状の形態を呈すること、③古墳南側の道路と水路が本来の墳丘形態を反映するらしいこと、④墳丘斜面に平坦面が巡り、二段築成の可能性があること、⑤古墳西側は傾斜が急で、水田耕作による削平を受けていることなどが明らかになった（梅澤ほか2014）。

従来、斑鳩大塚古墳は周濠をもたない古墳と考えられていた。しかし、古墳は平地に存在し、周濠がなければ墳丘の盛土を確保できない。そこで、2013年11月に古墳周辺における地中レーダー探査を実施した。その結果、①墳丘北側、南側、西側で幅８～10ｍ程度の周濠が巡ること、②墳丘西側の水田下で強い反射があり、古墳基底部付近の葺石が残存するらしいことが明らかになった。また、前方部の北東隅と想定される位置でも強い反射があったが、探査のみでは前方後円墳か否かを確定することはできなかった。

Ⅲ　2014年度の発掘調査

測量調査と地中レーダー探査の成果から、斑鳩大塚古墳は現存する墳丘よりも遺跡の範囲が大幅に広がることが確実視された。とくに前方部の有無は斑鳩大塚古墳に葬られた首長の権力構造や、斑鳩における首長系譜の変動を解明するうえで不可欠な情報である。そこで、2014年３月に斑鳩町教育委員会と共同で発掘調査を行った。

調査区は、周濠の反射が強かった墳丘の北側に１カ所（第１調査区）、前方部の北東隅部に相当する位置に２カ所（第２・第３調査区）を設定した。第１調査区では、幅８ｍ、深さ80㎝の周濠を実際に確認した。また、周濠の埋没後に建てられた掘立柱建物の柱穴を複数確認した。いっぽう、第２・第３調査区では近世以降に掘られた耕作溝を確認したのみで、古墳に伴う遺構は検出できなかった。

第１調査区で確認した周濠から、多量の埴輪や土器の破片が出土した。埴輪には円筒埴輪と器

財埴輪がある。前者はすべて円形透孔をもち、外面に縦方向と横方向の刷毛目調整を施す。焼成は土師質で、突帯はやや低い。これらの特徴から古墳時代中期前半（５世紀前半）に位置づけられ、斑鳩大塚古墳の築造年代が裏付けられた。器財埴輪には蓋形埴輪と家形埴輪が含まれる。また、周濠からは６世紀末～７世紀初頭に位置づけられる須恵器の破片が複数出土しており、その頃には周濠が埋没していたことが判明した（豊島編2015）。

Ⅳ　2015年度の発掘調査

2014年度の発掘調査では、周濠の存在は確定できたものの、前方部の有無は解明できなかった。そこで、2015年３月に２回目の発掘調査を行った。昨年度に引き続き、墳丘の北側、第１調査区の東側に第４調査区、推定前方部の北側に第５調査区、推定前方部の盛土部分に第６調査区、墳丘の南側に第７調査区を設定した。

第４調査区では、幅約８ｍ、深さ80㎝の周濠の一部を確認した。昨年度、第１調査区で確認した周濠の続きに相当する。また、第５調査区では、前方部に伴う周濠の一部を確認した。第６調査区では、当初の想定通りに墳丘盛土が現れず、調査は難航したが、２度に渡る調査区拡張の末、前方部の一部、ちょうど古墳のくびれ部付近を確認した。第５調査区と第６調査区の成果によって、斑鳩大塚古墳は前方部をもつことが確定した。

第７調査区では、調査区が狭いために全体が周濠の中に入ることとなったが、周濠を確認した。これによって、古墳の南側にも周濠が巡ることが判明した。

各調査区から、多量の埴輪と土器が出土した。埴輪には円筒埴輪と器財埴輪がある。円筒埴輪の特徴は前回の調査と共通する。器財埴輪では蓋形埴輪を確認した。遺存状態の良好な埴輪は、古墳のくびれ部に当たる第６調査区で多く出土した。埴輪と土器の他、第４調査区で緑色凝灰岩製の管玉が１点出土した。管玉は古墳時代のものと考えられ、本来は斑鳩大塚古墳に副葬されていた可能性が高い。

Ⅴ　今後の課題

２次に渡る発掘調査の結果、斑鳩大塚古墳の実態が少しずつ明らかになってきた。斑鳩大塚古墳は従来考えられてきた円墳ではなく、前方部をもつ古墳である。また、古墳の周囲に周濠を巡らす。墳丘には円筒埴輪が立ち並び、要所には器財埴輪が配置されていた。出土した埴輪の特徴から、古墳の築造時期は５世紀前半である。さらに、周濠が埋没するのは築造から150年ほど経った７世紀初頭頃である。

しかし、残された課題が多いことも事実である。確認した前方部は、測量調査や地中レーダー探査から想定したものよりも幅が狭い。そのため、斑鳩大塚古墳は前方後円墳とは断定できず、前方部の小さな帆立貝式古墳の可能性がある。それを確定するためには、前方部の長さと幅を確定する発掘調査が必要である。

また、現存する墳丘部分にはこれまで調査区を設定しておらず、段築成の有無、葺石の状況、埴輪の樹立状態などが不明である。今後、これらの情報を得るため、発掘調査を継続する予定である。

写真１　古墳遠景（中央の森が古墳）

写真２　墳丘測量の様子

写真３　地中レーダー探査の様子

写真４　第１調査区の掘削

写真５　周濠の検出状況

写真６　クビレ部付近の検出状況

写真７　第５調査区の周濠

写真８　現地説明会の様子

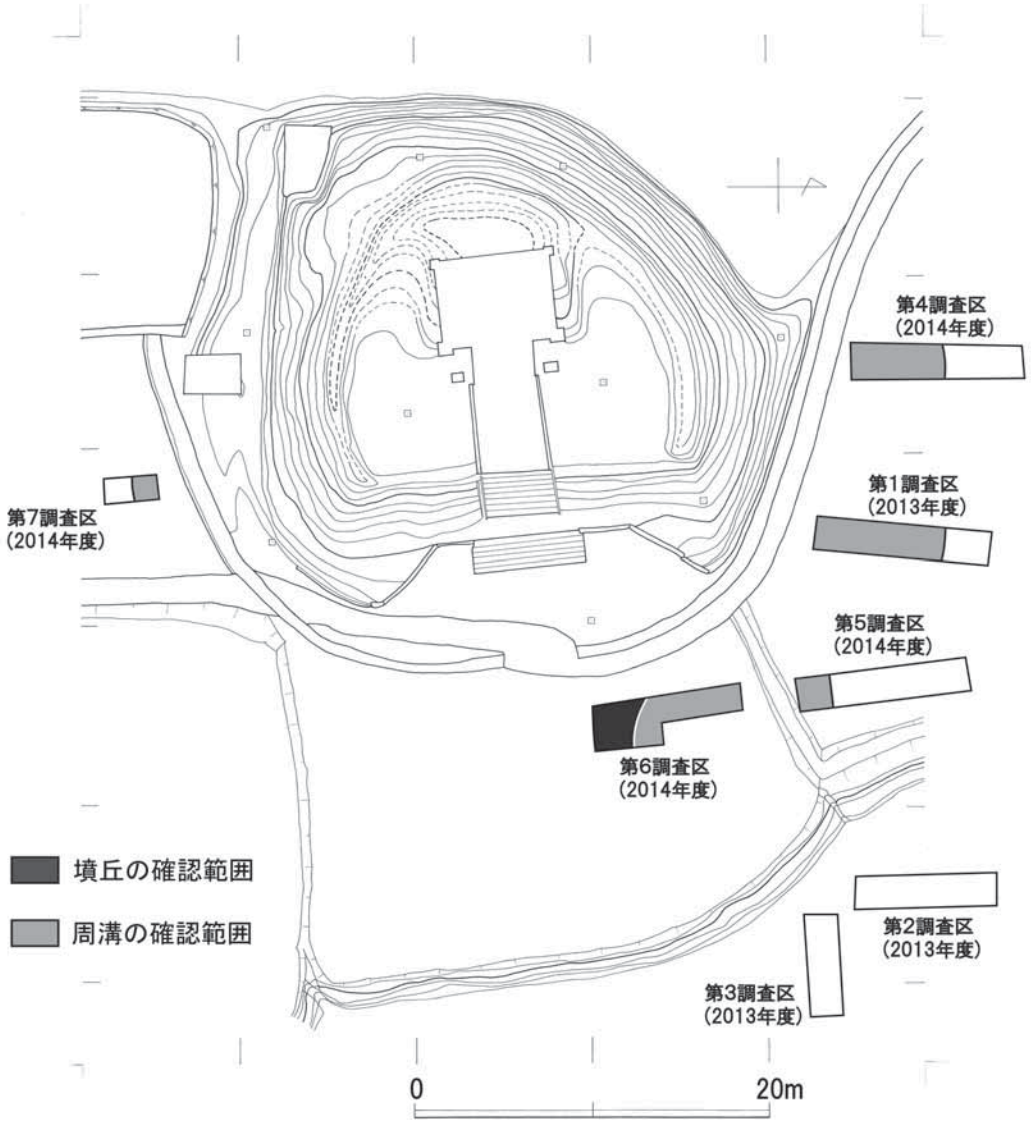

図１　墳丘測量図と調査区の配置

参考文献

梅澤あゆみほか　2014「斑鳩大塚古墳測量調査報告」『文化財学報』第32集　奈良大学文学部文化財学科
北野耕平　1958「斑鳩大塚古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第十輯　奈良県教育委員会
豊島直博編　2015『斑鳩大塚古墳発掘調査報告書Ⅰ』奈良大学文学部文化財学科

付　記

調査では斑鳩町教育委員会の荒木浩司氏、平田政彦氏のお世話になった。本稿の図面は本学文学部学生柴田拓也氏が作成した。また、調査には本学大学院文学研究科、文学部文化財学科の多くの学生諸氏に参加いただいた。記して感謝申し上げる。なお、本研究は平成26年度奈良大学研究助成を受けて実施した。

Summary

The Ikaruga Otuka tumulus is a round tumulus in Ikaruga town in Nara Prefecture. This tumulus was excavated in 1954. However, the correct shape and length are not clear. Nara University and Ikaruga town started the excavation of this tumulus in 2013. Firstly, we measured the mound. The mound is not round but a key hole shape. And during the excavation in 2014, we found a ditch around the mound. In the next excavation in 2015, we found a part of the key hole shaped mound. In the future, we must make clear the structure of the mound and the length of this tumulus.

【Key words】 Ikaruga Otuka Tumulus, Key hole shaped tumulus, haniwa(clay figures on the mound), GPR research